

特集 世界の住まい 今

イラン都市部の住宅事情と喫茶店

鈴木 均

●テヘランのライフスタイル

イランとりわけテヘランの住宅の構造は、どこか隠れ家的なところがある。テヘランで知人宅に呼ばれ、目立たない階段を上がり(または地下に降りて)外観とは打って変わって広いスペースの客間(ペルシャ語はサーロン)に通されると、そこは外界とは全く切り離された別世界であると感じさせられる。

各家庭において客間はイランの住宅空間のなかではいつでも外界と家のなかのプライベートスペースのクッションの役目を果たす重要な要素である。これは戦後の日本(特に東京など大都市)の客間のスペースを可能な限り切り詰めた住宅設計とは全く異なった思想であるように思われる。

どの国の住宅でもそうであるが、その家の住人と家族であるか

親戚であるか、または知人であるかなどの関係によって、訪問者が入っていくことの可能な領域には限度がある。よりプライベートな空間に入っていくということとは、それだけ親しい関係と認められたことに等しい訳である。

そしてイランでは日本のように部屋のなかに家具などを数多く置くことは少ない。多くの場合、日本では考えられないほど空間を広く贅沢に取っており、共通してみられる調度としては出窓のように窪ませた壁の一隅に父親など家族の写真を飾っていること位である。実際イランで知人宅を訪問する度に、彼らが日本と比較してほぼ一様に空間的に極めて贅沢な(何もない)スペースを享受していることを羨ましく感じるのは私だけではないだろう。

だが特に招かれて寝室などの奥

のスペースに入ってみると、そこは案外狭く質素な部屋に過ぎず、単に寝るためや着替えるため、あるいは荷物を置くための空間である場合も多い。他にキッチンやシャワールーム(ハンマーム)、トイレなどが配置されている。

例えば警察などの公的な権力が、イラン人の家庭のなかの最もプライベートな空間にまで立ち入るということは、余程のことがない限りは考えられない。イランの大都市部では家の外部の道路や商店街、公園などにおける喧騒と混乱、交通の渋滞などが著しいだけに、家の中の安全の確保というものは最も重要な社会的規範のひとつとして考えられていると言ってよい。

イランの家族は日常的に客間に集まって、談笑しまたテレビを観る。イランにおける親戚などの行

き来は現在でも日本と比較にならないほど頻繁である。このためイランにおいて客間のない住宅設計はほとんど考えられず、いきおい喫茶店など日本において客間の代用になるような店舗はテヘランなどの大都会においてこれまでほとんど見られなかったのである。

●喫茶店フームとその背景

だが今回六月に短期間テヘランを訪れてみて、市内の中心部に驚くほど沢山の喫茶店(コーヒーショップ)が出来ているのに驚かされた。私自身は喫茶店を学生時代から愛好してきた者であり、また暑く乾燥した夏のテヘランに以前滞在していた頃は喫茶店のような店舗が市内に皆無であることを嘆いていたので、この変化は大いに有り難い。

だが同時に、私はなぜ今この時代にテヘランなどで喫茶店の開設



テヘランのカフェ入口。

が一種のブームのようになっていくのかに興味がある。恐らく大学生などの若年層が全国から集まるテヘランのような大都市部において、彼らは大学の寮やアパートなどに住むことを余儀なくされているのであろう。イランの大学制度は以前から全国的な共通試験制度を採用しており、大学生時代に自らの希望と成績に応じて他所の都会に住むことは一般的にみられる。

そのような場合、可能な限り都市部に居住する親戚や同郷者を頼って仮住まいを始めることがイランでは普通であるが、そうでない場合は狭いアパートなどを捜して新生活を始めることも少なくないと思われる。

以前ならば彼らの友人らと集う場所は大学のキャンパスや公園、知人宅などに限られていた。だが二〇〇九年の大統領選挙以来、政府と一般市民のあいだの緊張関係が常態化している昨今では、こうした会合ですら当局からややもすれば睨まれるおそれがあるに違いない。テヘランの市民が普通に生活していくなかで、こうした無用な摩擦を避けつつ家のなかの安全を擬似的に実現するためには、喫茶店（カフェ）のような空間は少

し高額であつてもまことに都合のよい存在なのであろう。

筆者が今回最初にみつけたこうしたカフェの一軒は、テヘラン中心部の目抜き通りから辻（クーチエ）をちよつと入った場所の民家を改装した店舗であつた。看板だけの目立たない入口を入つてみると、テヘランの大きな寒暖を和らげるために半地下になつたフロアを使用しており、壁にはカルティエ・ブレスソンのパリの写真やチャップリンの肖像が飾られてちよつと無国籍風な雰囲気醸し出していた。

だが現在のテヘランなど大都市におけるこうしたカフェの形態は欧米文化の流入ではなく、むしろイランの地方都市から持ち込まれたものではないかとも想像される。実際私が一〇余年にわたつて調査している人口数万人規模の地方農村都市（ルースター・シャフル）においては一般的に住宅事情が非常に切迫しているところが多く、これらのなかには公園に併設する形で人々がお茶（チャーイ）や水パイプを楽しむことのできる喫茶店的な存在が運営されているようなケースも目にしてきたからである。

ここまで考えてきて、私はテヘランにおける現在の喫茶店（カフェ）のブームが案外古い都市文化の伝統を根に持っているのではないかと思ひ至つた。イランでは一〇〇年ほど前の立憲革命の時代に首都テヘランや北西部の主要都市タブリーズが運動の中心になつたが、この時市民のコミュニケーションの手段として重要な役割を担っていたのがガフヴェハーネ（字義的にはコーヒー・ハウスだがお茶や水パイプを供していた）のような存在であつた。

●住宅事情と若者文化

イランの政治状況が全く先行き不透明ななかに置かれている現在、テヘランなど大都市における市民生活はますます隠れ家のような家のなかの私的空間に内向しつつ、同時に若者を中心とする市民の多くはより安全な公的空間を求めているに違いない。こうしたなかで市民の無意識の選択が古い伝統の様式の再現を促している面があるのではないか。

だがいづれにしてもテヘランにおける最近の喫茶店（カフェ）の流行の背景には、急激に変化しつつあるテヘランの住宅事情と、こ

れに伴なつてある種の公的空間の欠乏感があるものと考えられる。もしここから新たな若者文化が發生していくことがあるとすれば、それはテヘランという都市空間における新たな抵抗文化の拠点になつていく可能性をも内包していることだろう。

だが現在のテヘランにおいて観察の視点をひとつの場所に固定させることにはあまり意味がないようにも思われる。それはテヘランにおける市民生活の多くが、これまで以上に隠れ家的な拠点としての住居スペースを移動させつつ逃走していくというスタイルを至上のものとしていると考えられるからである。

彼らの基本的な考え方はこうであらう。チャンスがあれば逃走せよ（或いは子供を逃がせ）、そしてそれには可能な限り自らのフットワークを軽くしておかなければならない。彼らテヘラン市民のこの原則を知った時、私は彼らが驚くほど物を抱え込まないことに對して以前ほど憧憬の念を抱かなくなつたのである。

（すずき ひとし／アジア経済研究所 地域研究センター）